

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370600506		
法人名	医療法人 悠紀会		
事業所名	ゆうきの家 (第1ユニット)		
所在地	熊本県玉名市上小田1180番地		
自己評価作成日	令和4年2月1日	評価結果市町村受理日	令和4年3月24日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和4年2月21日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ゆうきの家は、菊池川河川敷添いにあります。田畑・桜並木・四季折々変わりゆく自然環境を楽しみながら、利用者の“今”を丁寧に支えていく事を大切にしています。新型コロナウイルス感染症の影響で、生活のしづらさや行動の制限はありますが、ご本人とご家族の思いに少しでも多く叶えていける様、チームとして今出来る事を常に考えていきたいと思ひます。自己決定や意志を尊重し、お一人おひとりのお力をお借りしながら、その人らしい暮らしのお手伝いを大切にしています。重度化となり看取りの時が来ても、医療機関との連携を図り、最期まで「自分らしく生きる」ことへ支援していきたいと思ひます。手作りの保存食、味噌・梅干・ジャム等は、一緒に作り一年を通していただいています。地域・在宅支援として共用型通所介護を受けています。誰でも安心して暮らせるよう地域・在宅支援を行っていきたく思ひます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

四季折々の自然の移り変わりを五感で感じながら過ごせるホームは、桜やチューリップ等の開花を楽しみながらの散歩やお茶等の長閑な一時として生かされ、庭先のコンテナに腰を下ろし休憩される姿等の取り組みを広報誌等により継続的に発信しており、コロナ禍で容易に会うことが出来ない家族から好評を得ている。母体医療機関に隣接という立地は、本人・家族、職員にとっても安心となり、最期まで“らしく生きる”ことを共有し支援するホームである。運営推進会議が直接開催に至った折には、初心に戻り参加者とともに会議の意義や地域密着型サービス事業所としての役割をあらためて認識している。また、センサーに頼らないケアを実践し、身体拘束適正化委員会での情報の共有を入居者の支援に反映させている。ホーム立ち上げから関わる職員が5名も在職し、新たな職員との強固なチームワークにより入居者の日々を支えており、今後も変わらぬ支援が継続されることと大いに期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	理念の共有として、誰でも見える位置に掲示している。 1人1人がその人らしく暮らしていける様、日々のかかわりを大切にしながら実践につなげている。ケア等に悩んだとき、理念を振り返り考えていくようにしている。	法人理念を継承し、さらに具現化した4項目をホーム理念としている。“家族の一員として共に生活する…”とした理念が入居者と職員の日々の暮らしに息づいており、できる事を愛で、不足を補いながらの生活が定着している。法人理念は全体朝礼で唱和して原点に立ち返り、外部評価の機会にホームの理念について振り返り、見直しの有無に関わらず内容を検討している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍の状況において、行事等には参加出来ていないが、資源回収やどんどやなどに協力し交流している。 地域主催であるマラソンの父金栗四三のゆかりの地めぐりを目的とするマラニックに参加を予定していたが、コロナ感染拡大となり参加を見合わせる事になった。	長引く感染症の影響により外部との交流の機会が中断されているが、地域の有価物回収には地元職員が音頭を取り、職員が自宅からも持ち寄るなど出来る事で関わっている。定期的に訪れる移動販売車は入居者の楽しみであり、感染症対策をしてホーム前に出られ自らお金のやり取りをする方もおられる。市の広報誌も入居者の楽しみであり、地域情報の収集手段として活用されている。	長く続いてきたグループホーム連絡協議会の“ふれあい交流会”や地元中学校の福祉体験の受け入れ、法人保育園児との交流などの継続の為、今後の再開を見据えた取組が期待される。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	玉名市のキャラバンメイトとして協力を行っている。玉名市認知症応援団研修の講師役として、認知症の人の理解をテーマに伝えた。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に1度、生活状況、身体拘束についてなど、また地域の情報等を伝えていただき情報の共有、意見交換を行っている。新型コロナウイルスの影響で、書面上での会議開催となっていたが、昨年12月は、集まったの会議ができた。運営推進会議の目的を説明し、地域の情報等を得ることが出来た。	本年度も社会の状況を見て運営推進会議を資料送付による書面審議としていたが、昨年12月には通常開催が出来ており、参加者に向け改めて会議の意義や地域密着型サービスとしてのホームの役割について発信している。入居者やホームの現状、面会の状況、身体拘束適正化委員会の報告の他、参加者からの質疑応答に応じている。	地域、行政、ホームをつなぐパイプ役として会議がしっかりと定着しホーム運営に反映されており、職員の努力が窺える。感染症の状況によっては当面書面審議となる事が予想され、年度初回の会議資料については家族へも送付し、玄関への開示なども必要と思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議にて、情報の共有や意見交換を行ったり、何かある時は直ぐに連絡を取り合い、相談・協力を得る様になっている。	運営推進会議には地域代表者や有識者をはじめ、包括職員や行政担当者が参加しており、ホームの現状を発信しながら参加者からの意見や情報が運営に生かされている。職員がキャラバンメイトとして長く地域貢献に寄与しており、公民館などを利用して認知症の啓発活動に努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	日中は施錠せず、自由に動ける環境作りを行っている。職員1人1人が、身体拘束に意識を持ちケアに取り組んでいる。2か月1回の身体拘束適正化委員会では、不適切ケアと考える行為等について話し合いケアの実践に繋げている。委員会議事録は回覧で全職員が共有できるようにしている。	“身体拘束の方針”を玄関に掲げ、ホームの拘束に対する基本的な指針を明確にしている。運営推進会議で委員会の報告や取組について伝える事で外部に向けホームの透明性を図っている。センサーなどに頼らないケアを実践しており、職員の目配りや気配り、経験がケアに反映されている。	研修会で身体拘束の理解度について直後のアンケートを集計したり、“認知症高齢者のひとこと”に焦点をあてたDVDなどから自身のケアを振り返るなど、適正化委員会が機能している。今後も取組が大いに期待される。
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	年に2回、法人全体で研修を受ける学びの場がある。 運営推進会議時には、必ず、身体拘束について報告し情報の共有を行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人の研修として、学びの場がある。難しい内容だが、少しずつ理解出来ている。成年後見制度を利用している利用者がいる。何かある時は、後見人に相談、報告、許可を得ている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時に説明を行い、同意を得ている。変更等ある場合は、その都度、家族に説明を行い、理解、納得を図っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時等、話しやすい雰囲気を作り、世間話をしながら意見等聞くことができるようにしている。家族会を結成しているがコロナ禍の中で、行うことができていない。	家族会は食事会を兼ね、家族の意見を収集する機会として有効に運営されていたが、中止せざるを得なくなっており、職員は面会や電話などで入居者の近況を伝えながら、忌憚のない意見をもらうよう投げかけている。また、苦情などに対するホームの体制や手順は別紙にて家族に示している。入居者には普段の関わりの中で会話や行動からくみ取っており、帰りたいとの要求や行きつけの床屋への外出など個別の要望に応じている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月1回、ミーティングが行われ、全職員が参加し、情報の共有や意見、提案を聞き話し合う機会がある。提案等を法人の3事業所会議で相談できる場がある。	ユニット別にミーティングを開き、管理者が双方の場に参加して情報を共有している。入居者へのケアのあり方について、個々の現状を掘り下げたり、理念である残存機能を活かすという点で、つい手を貸してしまうことがないか等、細かい部分についても検討している。有休や希望休への対応、資格取得の後押しには法人の機能が反映されている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	人事評価制度があり、自己評価、上司の面談を受け、仕事について考え振り返る機会がある。 定年後も働ける環境がある。 子育て、介護、体調不良等個々の状況に合わせて働ける環境がある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	毎月1回の勉強会や、個々のスキルアップとして、資格取得に挑戦したり、認知症介護実践者研修等を受講出来る環境がある。コロナ禍の中で外部での研修受講が難しいため、ネット環境を整えオンライン研修に参加できた。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	県と郡市の地域密着サービス連絡会へ参加し他ホームの活動、生活状況や意見を交換し情報を共有することでサービスに生かしている。郡市支部会は、コロナの影響で開催されていない。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	傍に居ること。本人の言葉に耳を傾け、否定せずしっかり話を聞き、不安なく安心して暮らして頂ける様な関係作りに努めている。アセスメント時、本人の思いに少しでも近づいていけるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	これまでの生活等を家族に尋ね、困っている事、不安な事など家族の声を聞いたり、面会時には、ホームでの生活の様子や体調面を伝え、情報交換を行い、関係作りに努めている。一方的なケア提供にならないように配慮を行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	その都度必要としている支援を見極めながら対応している。 ミーティング時に、ひもときシートを活用し本人の現状を把握し、今できることを考えケアにつなげている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	暮らしを共にする者同士の関係を築きながら一緒に出来る事を声かけしながら行っている。又、必ずお礼の言葉「ありがとうございます」を伝えている。人生の大先輩として、教えている頂く場がある。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍で制限はあるが、面会時間に決まりはなく、いつでも来て頂ける環境がある（現在、ロールカーテン越しでの面会）。 本人の希望によって家族に電話をかけ話をしてもらい本人が安心してもらえる様、協力を得ている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	昔の話を聞いたり、馴染みの場所へドライブに出かけたりしている。 コロナ流行前には、友人や家族以外の面会も多くあった。	離職のない環境が入居者と職員の馴染みの関係性を作っており、入居者ができる事でホームの一員として活躍できる機会を提供している。音楽療法やフラワーアレンジメント、室内のレクレーションや月の行事は入居者の中に浸透しており、季節ごとの催し物には職員とともに飾りつけや環境整備を行っている。畑や花壇の整備、保存食づくり、正月飾りなどに先人の知恵が発揮され、入居前からの飲酒（現在はノンアルコール）が楽しみ事の一つとして支援されている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	職員がクッションとなり、一緒に話をしながら洗濯たたみなどが出来る様支援している。ソファーと一緒に座り、テレビを見ながら話をされている姿を見守っている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	偶然地域で顔合わせした時は、挨拶を行うようにしている。以前入居していた家族（娘）の入居相談をうけた。すぐに利用は難しいため法人内のサービスの説明を行った。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の会話の中から本人の思いを把握したり、言葉を発しない利用者には言葉かけを行いながら、本人にとってどうなのか心理的ニーズが満たすことのできるよう検討している。 ミーティング時に、ひもときシート、ICFを活用し、1人1人の思いや現状を知り、全員で検討している。	職員は入居者との1対1の時間や日々の関わりの中から思いを引き出し、出来る限り希望に沿いながら支援に反映するようにしている。家族の面会が制限される中であるが、玄関先で直接話を聞き、必要時に電話で意向を確認しながらプランに反映するようにしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人、家族からこれまでの生活状況の情報を聞いたり、情報提供書を活用したりし把握に努めている。本人との会話の中で、よく出る言葉を把握するようにしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日のバイタルチェックを行ったり、本人の生活リズムを把握し、少しの変化も見逃さない様にスタッフ間での情報の共有を行い把握に努めている。24Hシートの記入を行い職員間で共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	毎月のミーティング時に、ひもときシート、ICFを活用し、利用者の困っている事など、今の現状を把握し支援すべきことを話し合い、ケアプラン作成、見直しにつなげている。	職員を入居者の担当制としており、プランに関わらず居室の環境整備や衣類の管理などに関わることで細かい気づきがケア会議に反映されている。「自分らしく暮らしたい」との入居者の目標にフラワーアレンジメントの参加やドライブの声掛け、衣類の選択、状況を見ながら買い物に依ったり、できる事を引き出し、持てる力を継続する内容を掲げている。月のケア会議では入居者一人ひとりの現状を掘り下げて分析し、プランとリンクさせながら支援にあたっている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録を行い、気づき、工夫などあれば、その都度、情報を共有している。 気になる事、利用者の状態の変化がある時は、全員で話し合い、ケア対応を考えている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	デイサービスを夫婦で利用されている。家族の勤務の状況にあわせ、利用時間等柔軟に対応している。夕食摂取後、帰宅されている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	現在、自分で買い物をされる方はいないが、希望があれば、移動販売や買い物に出かける機会がある。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	専門的な治療が必要な場合は、法人の主治医に相談の上、受診を行っている。現在、皮膚科、泌尿器科へ行っている。緊急時の対応や何かあった時は、外来看護師に相談できる。	本人・家族の了承のもと現在は、隣接する法人医療機関をかかりつけ医とし、月1回の受診を支援している。他科受診については家族に相談の後、職員対応で受診に出ているが、状況によっては家族も同行し共有を図っている。歯科については必要時に外部歯科医による治療を母体病院で受けている。日々の歯磨きや口腔ケアは職員が行い、特に夜間の歯磨きを丁寧に取り組んでいる。また、月1～2回歯科衛生士による口腔ケアやチェックが行われている。	職員の些細な変化も見逃さない健康管理から、異常の早期発見に繋がっている。感染症の対応もあり困難なことも多いと思われるが、今後も主治医との連携を図りながら入居者の健康を支えていただきたい。
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	日常生活で体調の変化や皮膚の状況など気づきがある時は、看護師に伝え適切な受診や看護を受けられる様支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時、家族、主治医、看護部長、副部長、連携室と密に報告連絡相談を行い、治療がスムーズに行える様関係作りを行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末期のあり方について、家族に意向を確認し、主治医を交えて話し合いを行う。家族の心の動きなどに、その都度対応し、事業所に出来る事を伝えながらチーム全員で共有し、支援につなげている。	入居時に看取りに関する指針をもとにホームでの取組について説明を行っている。昨年9月に1名の看取り支援が行われた際は、家族が宿泊をされるなど、感染症の状況を見ながら出来得る支援をサポートしている。看取り支援後は職員へアンケートを実施し、本人を偲びながら振り返りの機会を持っている。	今後も日頃のケアを大切にホームでの取組に期待したい。また、ホームでの看取り支援と合わせ、特養施設についても伝えていきたいとしており、家族の思いを聞きながら取り組まれる事を願いたい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	オンコール体制がある。 勉強会で対応について学んだり、法人の急変時連絡対応マニュアルがある。定期的訓練は行っていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練は、年に2回行っている(昼間、夜間想定)。水害訓練は行っていないが、菊池川の水位上昇時(レベル3)は、法人の協力を得、病院4階へ避難を行っている。職員間でも大雨の時期は気象情報収集をしたり、直ぐに対応出来る様心がけている。	今年度は防災業者も参加し、6、10月に昼・夜を想定した避難訓練を実施している。訓練後は反省会により振り返りを行い、次回に活かすこととしている。災害備蓄は法人やホーム内でも確保している。河川に近いことから、大雨の時期は小まめな気象情報の収集や、菊池川の水位によっては法人医療機関への避難が行われている。	管理者は以前のように運営推進会議の協力を得た訓練についても語っている。家族にとっても河川への存在は気になる点であり、今後も訓練への取組や家族への報告が期待される。また、火災や自然災害と併せ、防犯対策についても検討されることを期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	人生の大先輩として尊重し、その時々の場合に応じた言葉かけを心がけている。	入居者の尊厳やプライバシーへの配慮については、日々職員間で共有を図っている。事務所には、『やめよう、ニンチ・はいかい』宣言を掲し「認知症」を安易に「ニンチ」と略す言い方や、理由が理解できない行動を「徘徊」と表現するあり方は、「尊厳・人権」に対する意識の低さを示すものであると記し、職員に徹底されている。呼称は苗字にさん付けを基本としながら、反応などから下の名など家族への相談も行いながら対応している。同性介助については、現在要望をされる方はおられない。	入居者の誕生日は当日に、希望のメニューなどを提供しながら楽しい時間が持たれている。高齢になられた方の誕生日は本人、家族にとっても嬉しいことであり、変わらぬホームの支援が期待される。
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日常生活で「どうしましょうか?」「どっちがいいですか?」などの選択肢のある声かけを行い、自己決定が出来る様支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	利用者の気持ちを最優先し1人1人のペースに合わせて、その人らしく過ごせる様支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	起床時など、1人1人が身だしなみを出来る様声かけ支援している(ひげ剃り、ブラシを通す、温タオルで顔を拭く、洗うなど)。その人らしい身だしなみが出来る様支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	目の前で野菜の皮をむいたり、心の動く働きかけを行っている。 誕生日の時は、食べたいものを聞いたり、行事食や旬の野菜を使用し料理を提供している。ミキサー食の利用者には、メニューを伝えながら介助している。	献立は作成せず入居者の希望や季節感などを考慮しその日のメニューを決定している。主菜と副菜を各ユニットで担当し、ご飯、汁物はユニット別で準備している。ホームの菜園や近隣者からの野菜の差し入れは、特に季節感のある一品となっている。食形態は個々の嚥下力に応じて提供しており、特にミキサー食の方には、メニューを伝えながら支援している。ホームでは味噌作りにも取り組んでおり、「同じ材料でもユニットで味が違うんですよ！」と語る職員からも、1軒の家としての様子が伝わってくる。	職員による手作り食の提供は入居者の楽しみや家族にとっても安心して繋がっていると思われる。継続した取組が期待される。
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	日々の体調、摂取の状況変化により、主食を粥にしたり、食べづらい時は、ミキサー、きざみにしたり、その都度柔軟な対応を行っている。 食事が入らない時は好みのアンパン等を提供したり食べれる物での工夫を行っている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアを行っている。うがいが出来ない利用者はスポンジブラシを使用し、口腔内の清潔を保っている(週1回義歯洗浄を行っている)。月に2回、歯科衛生士の口腔チェック及び職員に向けた勉強会を行っている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	夜間のオムツ、パッドの使用の仕方を見直し検討した結果、汚染も少なくなり、使用枚数を減少することが出来た。日中は、食前にトイレ誘導を行っている。	日中はトイレでの排泄を支援しており、布パンツやリハビリパンツに尿取りパットを併用しながら過ごされている。夜間はオムツやポータブルトイレを使用される方もおられ、使用後のポータブルトイレは洗浄を含め清潔に管理している。また、野菜を多く使用した日々の食事や手づくりヨーグルトの提供により、可能な限り自然排便に繋げている。排泄用品の使用については、職員間で検討を重ねる事で自尊心を保つ事や、家族の負担軽減ともなっている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事面では、野菜を多く使用したり、毎日、ヨーグルトにフルーツを入れ提供している。下剤を服用しても排便困難な時は、坐薬を使用しなくてはいけないケースもある。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	毎日入浴される方や2日に1回の割合で支援しているが、本人の希望や体調に合わせて個々に沿った支援を行っている。	毎日入浴の準備を行っており、入居者の希望や体調に配慮しながら午前から21時まで支援している。寒い時期は特に脱衣所や浴室の温度管理を徹底し、就寝の際は個々に応じ湯たんぽなどにより安眠に繋げている。入浴回数は2日に1回の人や家庭菜園や作業の時間を見越し16時以降毎日入らせる方など個別の希望に応じている。季節湯(菖蒲・柚子)も継続して取り組んでいる。	ホームの入浴は温泉水ではないが滑らかな肌触りであり、入居者の気持ちの良さにも繋がっていると思われる。幅広い時間帯での支援と合わせ、今後も入居者の楽しみとなる入浴支援の継続に期待したい。
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	午後からは、自室にて休んでもらったり、休憩の時間がある。夜間は、今の時期は部屋を暖めておいたり、湯たんぽ、電気毛布をしたり自立されている方へ布団を直ぐにかけられる様、セッティングをしている。静かな環境作り、明る過ぎない照明にする。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬が変更になった場合は、変化がないか観察を行い、異常があれば、外来看護師へ相談し受診につなげている。下剤のコントロールを行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	天気が良い時は、散歩をしたり、窓辺で日光浴をしている。法人の音楽療法士に協力を得て、月6回の歌う会が行われている。役割として、洗濯物たたみ、ゴミ袋に事業所名を記入したり、自分のお膳を下膳したり、朝晩の神仏様へのお参りなど、出来る利用者もいる。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	ドライブや買い物、花見等に外に出かけられる様に支援している。天気の良い日は、散歩に出かけている。	コロナ感染症の影響から地域行事等外出の機会が減少しているが、敷地内は季節を感じながら散歩や散策を楽しめる環境にある。見事な桜並木や入居者も一緒に管理する花壇や菜園の手入れ、庭先でのお茶休憩など活動の様子は聞き取りや広報誌などからも確認された。コンテナ椅子に座り、ホッと一息される入居者の表情からもホームの日常が伝わってくる。定期的に移動販売車が訪れており、入居者も庭先に出てアンパンや菓子などの購入をしながら販売者との会話を楽しまれている。	家族も入居者との外出の機会を楽しみにされており、コロナ感染症の早い終息が待たれる。引き続き外出支援に代わってホーム内での楽しい見事や、環境を生かした散歩、日光浴等の継続が期待される。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現在、所持している人は居ない。家族に相談し、必要な衣類等を購入してもらったり、事業所で購入している。家族から預り金は預かっている(散髪、パッド代など)。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人から希望される時は、家族に電話をかけ話が出来る様支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	室温はこまめに調整したり、換気も行っている。夜間はトイレの場所がわかる様に電気をつけドアを少し開け対応している。季節の飾りを折り紙で作ったり、ひな人形を飾ったり、四季を感じてもらえる様工夫している。	共用空間はそれぞれのユニット職員が工夫を凝らしながら季節感のある環境作りに取り組んでいる。敷地内に咲いた草花を飾ったり、入居者と一緒に作成した折り紙などの作品の掲示や、訪問当日はリビングに配置された雛段飾りが温かな雰囲気をもたらしている。また、玄関にも手作りの小物や、法人事務局より届けられた花鉢が置かれていた。感染症への対応として、換気や掃除、消毒の徹底などこれまで以上に衛生管理にも努め、入居者が安心・安全に過ごせる環境に努めている。	経年と共に物品が増えたり、掲示物の傷みなども見られることから、今後は定期的な見直しの機会も必要と思われる。取り組みに期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共同空間の中に、それぞれの場所にソファやテレビがある。気の合った者同士と一緒に過ごしたり、日光浴をしたり、独りになれる空間もあり思い思いに過ごせる居場所の工夫をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	家族から日当たりの良い部屋を希望されたり、ラジオ、お花、家族写真などがあり、1人1人に合った居場所作りを工夫している。	開設年度の違いから、各ユニットは居室内の広さや窓(腰窓、掃き出し窓)、採光など異なる面もあるが、共に安心して過ごせる居室環境に努めている。入居当初には持ち込み品についての依頼は控え、生活をしながら必要な物を揃えてもらうようにしている。また、クロゼット(押入れ)が備わっており、季節外の衣類などがスッキリ収納できている。テレビやラジオ、家族の写真などの他、仏壇や位牌を持ち込まれている方には、ご仏飯を準備するなど心の拠り所となる時間を支援している。	隣接する母体医療機関より入居された方は、自室の窓から病院の建物が見える事で安心されるなど、本人の目に映る光景も居心地の良さに繋がっていることが窺える。面会が制限されている状況であり、ひき続き家族の安心に繋がる居室内の情報発信に期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	夜間は、トイレの電気をつけトイレの場所がわかる様にしたり、自室の入口には名札やのれん等でわかりやすい様に工夫している。ポータブルトイレの前には、すべり止めマットを使用し安全に配慮している。		

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370600506		
法人名	医療法人 悠紀会		
事業所名	ゆうきの家 (第2ユニット)		
所在地	熊本県玉名市上小田1180番地		
自己評価作成日	令和4年2月1日	評価結果市町村受理日	令和4年3月24日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://search.kaigo-kouhyou-kumamoto.jp/kaigosip/Top.do
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和4年2月21日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

ゆうきの家は、菊池川河川敷添いにあります。田畑・桜並木・四季折々変わりゆく自然環境を楽しみながら、利用者の“今”を丁寧に支えていく事を大切にしています。新型コロナウイルス感染症の影響により、生活のしづらさや行動の制限はありますが、ご本人とご家族の思いに少しでも多く叶えていける様、チームとして今出来る事を常に考えていきたいと思ひます。自己決定や意志を尊重し、お一人おひとりのお力をお借りしながら、その人らしい暮らしのお手伝いを大切にしています。重度化となり看取りの時が来ても、医療機関との連携を図り、最期まで「自分らしく生きること」を支援していきたいと思ひます。手作りの保存食、味噌・梅干・ジャム等は、一緒に行い一年を通していただいています。共用型通所介護を受けています。柔軟な対応で、誰でもが安心して暮らせるよう地域・在宅支援を行っていきたくと思ひます。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	玄関の入口、事務所の見える所に理念を提示してある。 本人の意思を尊重し出来る力を大切にし、その人らしい生活が出来るよう実践につなげている。		
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	地域のスーパーから食料品を仕入れている。 地域の廃品回収、どんどやなどに参加させて頂いている。地域の消防団に年末の夜警巡回を行ってもらっている。		
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	玉名市のキャラバンメイトとして協力を行っている。月に1回誰でもが気軽にこれる認知症カフェを開催している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	生活状況などの報告を行い、意見や質問を求め、出た意見などは議事録に残し職員で共有している。コロナ禍のため会議が行えない時には、書面での報告を行っている。		
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議などを通して協力を得ている。何かあった時は、相談を行っている。		
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	法人の研修等で理解を深め、身体拘束のないケアに努めている。 日中は、玄関などの施錠を行わず、自由に出入りできるようにしている。		
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	法人の研修で年2回学ぶ機会がある。 職員のストレス等にも視野にいれ防止に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	法人の研修で学ぶ機会があり、利用者の状況に応じて対応できるように努めていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時、必要事項を説明している。改定などがあった時は、書面などで説明し同意を得ている。分からないこと等あった時には、その都度対応し納得されるように説明を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	面会時など常に家族の意見、希望を受けられる様にしている。家族の言葉などは記録を残し職員間で共有している。		
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回のミーティング時に意見を言う場がある。また、気づいた時にいつでも報告、相談できている。		
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	個々に合わせた勤務状況になっている。有給を取ることが出来、年に2回、人事評価がある。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍で研修難しくなっているが、リモートやYou Tubeで研修や勉強会を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	玉名郡市地域密着サービス支部会で2ヶ月に1回、情報共有や勉強会を行っていたがコロナ禍で開催できていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	安心して生活ができるよう、本人に寄り添い色々な会話をするなかで、本人の思いを知りながら少しずつ関係づくりができるように努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居時、家族の思いや不安なことを聞き、心配なく安心されるような対応に努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人が今必要とするサービス支援を家族と相談し受けれるように対応している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	本人が持っている力を大切にしながら出来ることは、一緒に行っている。毎年、チューリップの球根を植えたり、門松を作っている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族の思いを知り共に支えられるような支援に努めている。面会時、生活状況を伝え家族との時間を大切にできるように努めている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍で難しくなっているが、いつでも面会に来てもらえるような環境作りに努めている。 行きつけの床屋に希望があった時には、いつでも行けるように努めている。		
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	座る席が決まっている、利用者同士の会話があり、時には、職員が間に入り、良好な関係が築けるように支援している。シーツの端っこを互いにもちながら、たたむ姿を見守っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	いつでも相談できるようにしている。利用が終了になっても、梅・筍等の時期には、気にかけていただいている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	本人の希望を聞き、ひもときシートを活用し本人の思いを大切に出来るよう検討している。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	本人や家族に聞いて情報を得ている。普段の会話から得られる情報もある。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	バイタルチェックや日々の表情、行動などの変化などを見て現状の把握に努めている。24時間シートの活用で、職員間の共有を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	ミーティング時、ひもときシートを使って話し合いを行い、介護計画を作成している。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々の記録を個別に記入し情報の共有を行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	デイサービス、ショートの利用、家族の事情などで、緊急のショートを受け入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍で外出が難しくなっているため、移動販売で買い物を行い職員の見守りの中、自ら支払いを行っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	希望するかかりつけ医に受診でき、定期受診を行っている。急変時の対応や、何かある時は、外来看護師に相談できる。		
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	変化に気づいた時には、看護師に相談し状態に応じて病院受診している。看護師は、24時間連絡がとれるようにしてある。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	情報提供書をもとに、情報の共有に努めている。また、連携室との連携を行っている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に説明を行っているが、状態の変化によって、家族と相談しGHで出来ることを伝え、病院と連携して支援に努めている。		
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	勉強会で学ぶ機会があるが、定期的に訓練を行うことは出来ていない。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年に2回、消防訓練を行っている。運営推進会議時、訓練を行い地域の方の協力を得ていたがコロナ禍の中で行えていない。水害時は、法人との連携により安全に避難できるよう協力体制がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	否定的な言葉や本人が不快にならないような言葉かけに気を付けている。		
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	本人の希望を表せるような声かけ、働きかけを心掛けて対応している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	希望は対応するようにしている。 自力で起きられる方は声かけし自分のペースで起きてもらっている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	服はなるべく本人に選んでもらい更衣する。ブラシを渡すと自分で髪を整える。自室にある鏡を見て、ブラシをかける姿がある。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	季節の野菜を使って料理したり、利用者に野菜の皮むきを手伝ってもらっている。 利用者の希望されたものを作ることがある。		
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	毎食、食事量のチェックをして摂取量が少ない場合は、栄養補助食品や、その時、本人が食べれる物で対応している。 一人ひとりの状態に合わせた食事形態のものを出している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないように、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	自力で歯みがきができる人には、声かけを行っている。介助が必要な人も本人にきちんと声かけを行いケアを行っている。夜間は義歯洗浄水につけている。 月2回、歯科衛生士による口腔ケア指導がある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	日中は、布パンツを使用し、時間を見て声かけしトイレ誘導をしている。		
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	ヨーグルトを1日1回食べ、繊維のある野菜を多く使った食事をしている。水分摂取に心掛けている。排便チェックを行い、必要時下剤の検討を行なっている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	毎日、入浴の声かけをしており、本人が入りたい時に入浴できるように支援している。昼食後から夕食後に入浴される方もいる。		
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	日中、自室へ戻りお昼寝したり夜間も一人ひとりが休みたい時間に休まれる。冬場は湯たんぽを使用したり室温調整などの支援をしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の変更などは、日誌や申し送りなどで確認し、一人ひとりの薬のファイルがあり副作用などの確認ができる。薬の変更時は、体調の変化などに気をつけ対応している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	散歩やドライブに行き、外の空気を吸うことで気分転換を行っている。歌う会で歌を楽しまれる。利用者と職員で五並べ、カルタをする時間がある。チューリップを植えたり、門松作りを一緒に行っている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	天気の良い日は、散歩に行ったり花を見にドライブに出掛けたりしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	家族の協力を得ながら自己管理されている方もおられる。自由に買物が出来るように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望時、家族に電話している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節の花や飾りなどをして季節を感じてもらっている。廊下、居間などにソファを置き、いつでもくつろげる場所がある。台所での調理する音、においを感じてもらうことを大切にしている。 夜間、トイレ起きされる方の居室の入口灯を点けている。		
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファに座り外の景色を見て過ごす場所がある。庭に花が咲く時期は、花を見ながら利用者同士の会話がある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	使い慣れた家具を使用したり、テレビや冷蔵庫を置いている。 利用者に合わせベッドの配置・高さを変えている。		
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	手すりを使っての歩行、車椅子の自力走行、老人車、歩行器の使用など本人の状況に合わせて対応している。必要な方には、ベッドに移動バーを設置し夜間ポータブルトイレ使用。足元にはヨガマットを置き、すべりや衝撃防止に配慮している。		